

2024年度 学校評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

報告者 校長 加藤篤彦

I 自己評価

1. 本校の教育目標

「校訓」 正しく 強く 美しく

2. 本年度の重点目標

- 1) 教科横断的な学びを考え、計画的に指導を展開する
- 2) インクルーシブ教育を一層推進する
- 3) 自閉症児の社会自立に向けた「ライフスタディ」という新たな学びを指導に入れる

3. 重点目標についての評価（A～D）と取り組み状況や課題

A・・・達成できた B・・・概ね達成できた C・・・達成が不十分 D・・・達成できていない

1) 教科の枠を超えた横断的な学びについて（ B ）

- ・ 学年ごとに「学習テーマ」を設け、一つの学習テーマを多面的な方法で探究し、発表した。プロセスではディスカッションすること、またまとめでは皆の前でのプレゼンテーションを実施し、総合的な学びにつなげた。
- ・ 校外学習と単元での授業を結びつけて総合的に学習を進めてきた。校外学習と連動させることで、学びをより身近なものとしてとらえられるようにした。

2) 「こころの教育」の推進について（ A ）

- ・ 「ともに生きていく」というテーマで年間の授業設定をし、ASD 児とともに体験する時間を持つことで、友達と関わり、他者との関わりについて考え学ぶ機会を増やした。体育祭での学年競技練習のプロセスを各学年で2日間、保護者に公開する時間を設け、保護者に練習過程を見ていただく機会を作れたことで、児童のみならず家族にもインクルーシブ教育の理解を深めていただけた。
- ・ 道徳「こころ」のカリキュラムでは昨年度より対話（答えのないテーマでの話し合い）を丁寧に扱うようにしてきた。他者の考えを知り、受け止め、自分の考えを深め、互いにとっての納得解を得られるような学びを実践した。

3) ASD クラスの「ライフスタディ」について(B)

- ・ 子どもたちが社会で生きていくために必要とされる知識や教養を学ぶ時間を確保するようにした。
- ・ 特に小学生の時代に体験したり、学習したりしたほうがよい事項を挙げ、分類して活動をした。

4. 総合的な評価と今後の課題

机上での学びを校外学習とつなげることで、教科横断した学習と、校外学習の機会に自分自身が体験することでの学びを連動させることによって、より深い学びにつなげた。

与えられた課題を素直に取り組むだけでなく、「なぜ」、「どうして」、「知りたい」と、自ら「探究する力」を育むことにつながった。

また、互いに話し合う、発表し合う活動によって、多くの情報から必要なことを精査する「選ぶ力」「判断する力」とともに、まとめたことを人に「伝える」ために工夫する活動にもつながった。

友愛会(児童会)では、児童自身がテーマを決めて、グループで活動し、小学生全体に呼び掛けたプロジェクトを実施するなど、主体的な学びが実施できた。

Ⅱ 学校関係者評価

1) 教科の枠を超えた横断的な学びについて

- ・ WEB 配信などで、家で子どもから聞く話だけではなく、具体的な取り組みを画像や映像で示されることで、理解が深まった。また、普段の様子をオープンに見学できる機会がさらにあるとよい。
- ・ 学校行事においても温暖化などの影響がある。その対応がされていて安心できる。例えば体育祭で児童にも保護者用として TENT を設営する配慮があり、ありがたかった。

2) 「こころの教育」の推進について

- ・ インクルーシブ教育においても保護者が学校行事前に児童の活動を参観できたことで、児童の学びのプロセスを把握できたことは有効であった。

3) ASD クラスの「ライフスタディ」について

- ・ 社会科、理科、英語の分野での楽しい学習展開とともに、生活に必要なスキルを自然に学べる対応が工夫されている。児童の生活の中で身に付いていくことを実感しているが、今後も期待している。
- ・ 学園祭の展示や保護者会の活動報告を通じ、全学年の取り組みについて理解が深まり、進級した学年での学習内容や身につけるべきスキルなどの目標が分かった。
- ・ ASD 児は学校行事等の変更があると不安になることがあるが、変化に適応できる力を育てる教育的支援も重要だと考える。

4) その他

- ・ 対面での保護者会の実施やオンライン配信のバランスを今後も工夫して、付加価値の高い内容提供を目指してほしい。